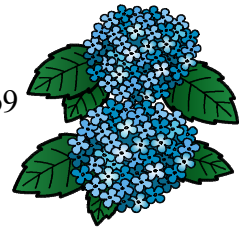
校長室通信

南小国町立南小国中学校

令和元年６月 14 日（金）No9

文責　狭間卓史



備える、積み上げる



【赤井友美さん】

今週、１２日（水）～１４日（金）の三日間の日程で、本校の二年生が町内１７か所の事業所等で「まちインターン」（従来の職場体験）を学習させていただきました。 今年からの取組は、髙橋町長や岩切教育長からの直々の依頼を受けられた赤井友美さん（一般社団法人子供教育創造機構理事）をコーディネーターとしてお迎えし、職場体験を土台から組みなおしていただいてのことでした。そういういきさつから、取組の名称自体も「まちインターン」に変更させていただいた次第です。赤井さんご自身は東京都在住で事業をしていらっしゃる方なのですが、本校や本町のために定期的に来町してくださり、今回の取組にも三日間お手伝いいただきました。

職場体験自体は、これまでの本校でも取り組み、町内の多くの方々にお世話になってきました。その取組を通じて地域の方々との触れ合いの中で、社会人として働くことになる近い将来への意識を高める機会として位置づけていた取組でした。

しかしながら、日本国内でも著名な研究機関である野村総合研究所の２０１５年の報告よれば、近年の情報社会の目覚ましい発展により、現在の日本人の職業の約５０％は、今後１０年～２０年のうちに、AI（人工知能）やコンピューターに取って替わられる社会になるとのこと。この流れは日本だけでなく世界的な流れであるとも言われています。そういう時代に、社会の中核になる子どもたちだからこそ、大きな変化に対応していく力が求められることになるといえます。その対応していく力を育てていく取組の一つとして、今回の「まちインターン」があります。

またその一方で、昭和～平成の時代に南小国町の児童・生徒数は大幅に減少してきました。このことは町の将来像を描くときに、大きな課題として挙げられているところです。だからこそ、夢をもってこの町に残ってくれる人や戻ってきてくれる人を一人でも多く増やす。あるいは、たとえ町外で暮らすことになったとしても、本町の魅力を自信をもってアピールできる人を育てる。・・・これらの課題に対する答えも今年からの「まちインターン」には込められています。 とは言っても、インターン先の方々に「思い」を聞かせていただき、現在の自分が考える改善のアイデアを伝えること、その土台としてコミュニケーションをしっかりとっていくことが本校の中学生に課せられた課題でした。受け身の姿勢でいるだけでは達成できない課題であり、主体性を問われる取組です。また、その力を引き出していただくことも各受け入れ先にはお願いしてあったとのことで、生徒にとっても、受け入れ先の方々にとってもハードルが上がった取り組みだったと言えます。「自分でやりきる」、「自分がやってみたいことを見つける」、「自分の表現力、発想力、創造力を思う存分使う」等々、今回の取組を今後にどのようにつなげていくのか。学校に課せられた課題でもあります。



【大仁産業での様子】

変化の激しい未来であろうからこそ主体的に生きる力を備えてほしい。・・・その思いのもと、町を挙げて、少しずつ、少しずつ積み上げていく。その取組が始まりました。

※（「まちインターン」での生徒の姿等については、また次週以降にお伝えします。）